

2011 年 4 月 15 日

福島第一原発周辺における動物たちの現状

報告書作成日 2011 年 4 月 17 日

新庄動物病院 院長 今本成樹（獣医師）

連絡先 奈良県葛城市葛木 104-1 新庄動物病院

2011 年 3 月 11 日に三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の大地震、それに伴う津波が発生した。それにより、宮城県、福島県、岩手県、茨城県など東日本の太平洋岸沿いで多くの人命が失われる大災害となった。さらに東京電力福島第 1 原子力発電所が大津波に襲われ、電源機能を全て喪失したことで相次いで爆発事故が起きた。それに伴い放射性物質が漏れ出し、かつて経験のない深刻な事態が現在も続いている。このため、東北や関東ではライフラインが寸断され物流網がマヒ、福島第一原発の周囲 20km 圏内からは、住人が退避した。住人の方々は、様々な避難所へ避難しているため、誰がどこに避難したかを 2011 年 4 月の段階では即座に判断することができない状況となっている。これにより、20 km 圏内に多くの動物（犬や猫だけではなく牛や豚なども）が取り残される事態が発生している。

福島県では、中通りや浜通りを中心に乳用牛、肉用牛、豚、鶏などの家畜が飼育されている。福島県の平成 21 年の農業産出額は 2,450 億円で、このうち、畜産の産出額は 513 億円と農業全体の約 21% を占めており、米、野菜に次ぎ第 3 位の産出額である。平成 22 年度 2 月 1 日現在のデータでは、乳用牛は全国 13 位（1484000 頭）、肉用牛は全国 10 位（2892000 頭）の飼育頭数。豚は全国 18 位（9899000 頭）、ブロイラーは、全国 21 位（106374000 頭）、採卵鶏は、全国 14 位（17820800 頭）が飼育されている。そのうち原発エリアには、約 120 戸の農場が存在、福島第 1 原発の半径 20km 圏内の避難地区では乳用牛 870 頭、肉用牛 2,500 頭、豚 3 万頭、鶏 63 万羽が飼育されている。さらに 30km 圏内全体では、鶏は 190 万羽、肉用牛 1 万 2 千頭（繁殖牛中心）、豚 3 万 9 千頭が飼育されている。そのうち大規模農場が 4 件。その一つは、母豚数にて約 6000 頭程度いるとされ、原発の近くにあるために未だ立ち入りされていない養豚場もある。そのエリア内の農場は緊急退避により、世話などができていない状態である。現段階では、「放置」状態に晒されている。立ち入ることができないため、残された家畜がどの程度死亡しているか国や行政機関でも確認できない状況となっている。

そこで、我々は、20 km圏内の動物に対しての調査を実施した。今回報告するのは、主に馬、乳牛、肉牛、採卵鶏、豚である。犬や猫は、調査の道中で見かけた場合に、撮影して観察している。

20km 圏内に飼養されていた家畜は住民が避難しているため家畜への水・飼料も供給できず、家畜改良センターから公共牧場への移動申し出あったが、現地では人命優先でのため、いまだ実現できていない状況であった。原子力安全保安院から出荷制限がかけられた原乳や野菜については移動させず、その場で処理するよう指導されているため、区域内にある家畜を圏外などに移動させること自体が難しい。農水省は、半径 30km 圏周辺に粗飼料のストックポイントを置いて、屋内退避圏内にある畜産農家が使えるよう何らかの対策を検討している（3 月末の情報）。しかし、20 km圏内においては、一時帰宅した農家が自主的に世話をしている状態である。しかし、避難所から帰宅していない農家では、そのまま放置されているのが現状であった。

農水省の原田英男畜産企画課長が民主党農林水産部門会議で3月25日に行った説明では、「原子力安全委員会からは出荷制限された地域の野菜、生乳はその場で処理するように助言を受けている。20 * 圏内の被爆量の多いものを持ち出せるかの問題もあり、自衛隊などと相談しながら対応を考えたい」と述べ、自衛隊と連携した対応を検討中とした。その前日には、農水省の篠原孝副大臣が、日本酪政連の馬瀬口弘志、今村攻両副委員長が同日要請した際に説明を受けた際に、半径 20 * の避難指示圏内の家畜の対応について「死亡していても埋めることもできず防疫上からも大変な状況。対応を検討している」と述べている。しかし、4月15日の我々が立ち入り調査を実施した段階では、馬の肥育を行う農家で実施された一度だけであった。現在はその農家においても、死体は、以下の写真のようにシートをかけられて置かれていた。



(写真 1) シートで覆われた馬の死骸



(写真 2) 馬房の地震による被害

この馬の飼育者によると、地震発生後2頭が外に出ていた。津波による死亡は4頭(津波によるけがなどが原因の衰弱死を含む)。それ以降に死亡した馬は8頭、ボランティアにより搬送された馬は11頭、現在世話をしているのは18頭であった。衰弱していた馬は、移動のストレスで死亡することがあるので移動できないと判断されたために、全頭は搬出されなかった。また、肥育馬については痩せ細り「再び出荷できる体格になるまで1年はかかるかもしれない。」とのことであった。



(写真 3)

この農家では世話をされているので、この農家の資金面と立ち入りへの問題がなければ、この馬の世話は可能な状態である。この厩舎は、地震での被害がある。写真2の厩舎のすぐ隣の馬房では3頭がいた。それ以外の厩舎では、15頭が世話をされていた。



(写真 4)

小規模な厩舎がいくつもあった。隣の家は被害があるため、余震などによる被害が出ると、飼育スペースが足りなくなる可能性が考えられる。

浪江町の吉沢牧場

放牧されているために、死亡はほとんどない。



(写真 5)

放牧されているので、ほとんどが生存。痩せてはいるものの、人を見つけたらこちらに歩いてくる。長時間いると囲まれるので、一般人が長時間立ち入るには危険。後肢もいるが若干痩せてはいるが歩様もしっかりしていた。



(写真 6)

死亡した牛は、一か所に集められているが、埋葬はされていない。牧場内に自信による地割れや陥没が観察された。死後どの程度経過しているかは不明。

ホルスタインの牛舎



(写真 7)

柵の中で、全頭死亡。すべて痩せている。4月10日にフリーカメラマンが撮影した写真では、生存個体がいたはずの場所。



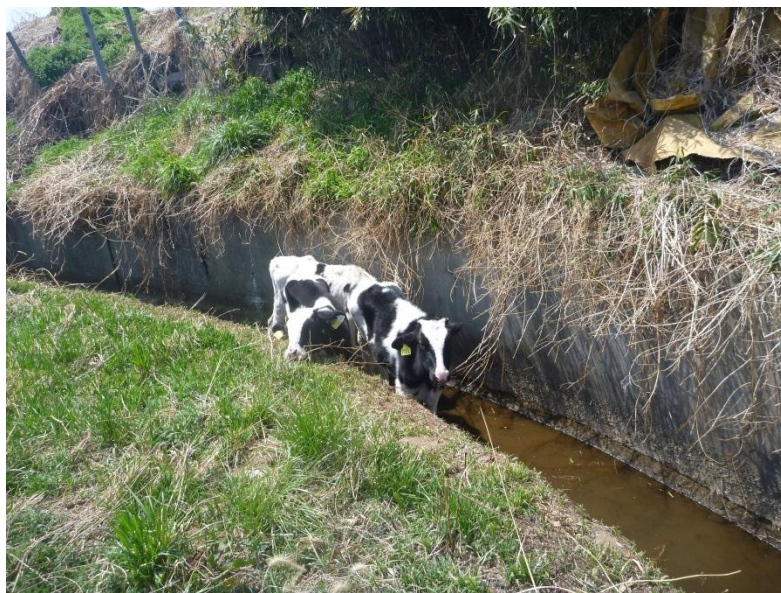
(写真 8)

衰弱して後肢をはまった穴から出せない牛もいた。この場所では、72頭の牛を確認し、生存個体は衰弱例も含めると、27頭であった。



(写真 9)

起立不能の牛（中央）。水を与えると飲める。飼料を与えると食べることができた。



(写真 10)

外にいる牛のうち 3 頭が水路に落ちていた。4 月 16 日の段階で 1 頭が起立不能で水の中で瀕死の状態であるとの報告を受けた。水路から首を伸ばして食べることができる草を食べていたが、ほとんど食べつくしている状態であった。



(写真 11)

このブロックでは、生存は1頭のみ（起立不能）であった。死亡は28頭。



(写真 12)

外に出た牛たちは、周囲の草を食べていた。痩せてはいるものの歩様はしっかりとしている。ビニールや紐を口にする牛もいた。



(写真 13)

いくつか柵が解放されている部分があり、エサを与えた形跡がある。他の人が入ってきて世話をしている可能性が高い。



(写真 14)

死亡の牛の中には、腹部内でのガス発酵（死後のもの？）が認められている。死後かなり経過している個体がいると考えられた。

養鶏場の視察報告



(写真 15)

左の上段	生存 9 羽	死亡 41 羽	左の下段	生存 7 羽	死亡 44 羽
右の上段	生存 6 羽	死亡 46 羽	右の下段	生存 3 羽	死亡 48 羽



(写真 16)

外に出られたものは、何ものかに襲われたような可能性が高い。
外で死亡している鶏 6 羽



(写真 17)

死亡している鶏。



(写真 18)

場所によって、生存個体が著しく少ない場所があった。写真 19 のように全滅している場所もある。



(写真 19)

地震で傾いた鶏舎。生存 9 羽、死亡 63 羽、外に出ている 9 羽。



(写真 20)

水を供給するようにはなっているが断水の影響で水は供給されていない状態であった。この鶏舎では、左右の上段下段に飼育されていたが、左上段：生存 27 羽、死亡 20 羽、左下段：生存 16 羽、死亡 16 羽、右上段：生存 27 羽、死亡 45 羽、右下段：生存 11 羽、死亡 63 羽であった。衰弱個体が数羽おり、目の前に飼料を置いても食べなかった。



(写真 21)

ここでは、上段：生存 8 羽 死亡 72 羽 下段：生存 6 羽 死亡 68 羽



(写真 22)

鶏舎が倒壊しているのもあったために、調査は一部でしか実施できていない。
倒壊した鶏舎からは、鶏の声は聞こえてこなかった。



(写真 23)

写真右の建物と中央の建物は倒壊している。この建物には様々な物品が下敷きとなっていた。奥の鶏舎までは、危険なため立ち入っていない。



(写真 24)

倒壊寸前の鶏舎。こちらからは、鶏の声は聞き取れていない。

原発から 3 km 付近の養豚場における現状

POB 太平洋牧場



(写真 25)

中央の豚は生きてはいるが自力で水は飲めない。その左の豚も生きてはいるがかろうじて呼吸をしている状態。



(写真 26)

ほとんどが 20 頭ほど入っているが、ほぼ全滅。約 400 頭がいたと思われるが生存は 6 頭であった。



(写真 27)

生きている豚の柵内には、共食い（左下）と考えられる死体がある。生存個体がいたのは5つの柵内で、生存個体は6頭であった。



(写真 28)

皮膚をはがされた形跡がある。



(写真 29)

写真 28 のような所見がある柵内に生存個体のすべてがいた。



(写真 30)

写真 25 の生存個体の下にある死体にも写真 28 と同様の所見が認められた。



(写真 31)

ここでも同様の所見がある。



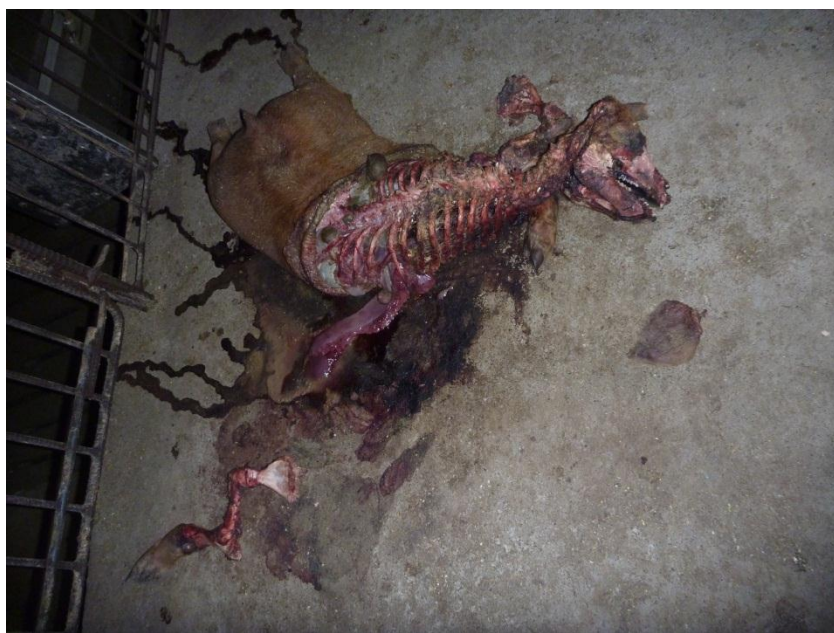
(写真 32)

全滅しているところでは、今まで示したような、皮膚がはがれている所見は確認されない。



(写真 33)

ミイラ化したような死体も確認された。



(写真 34)

柵から外に出た豚の死体。
何ものかに上半身を食べられた跡がある。



(写真 35)

先ほどの上半身を食べられた死体と同じ通路には、損傷の形跡が認められない死体があった。どのようにして柵から出たかはわからない。



(写真 36)

黒色の液体を口から出して死亡している豚もいた。血液のように思われるが、その原因は不明である。



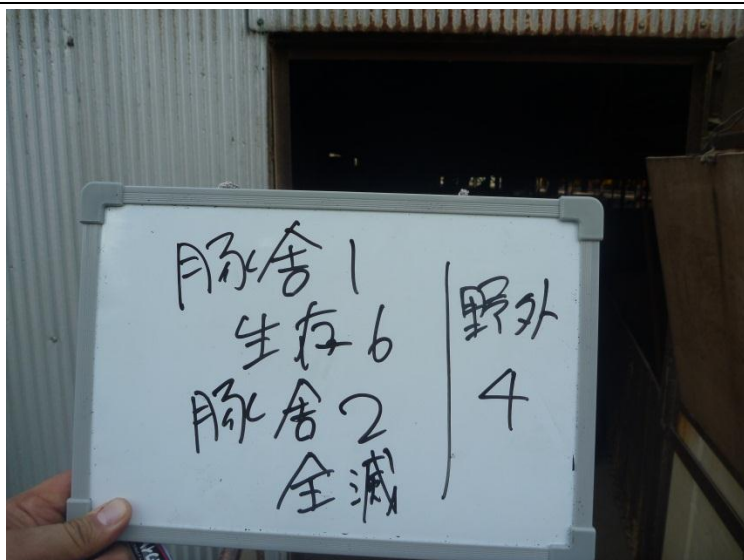
(写真 37)

地震の影響で一部床が壊れていた。正確な死亡数は確認できていないものの 400 頭を超える死体の存在は確認した。



(写真 38)

先ほど調査した隣の豚舎でも、多数の死体があった。生存個体は確認できなかった。



(写真 39)

屋外にいた豚は、脱出経路は不明であった。もう一つの豚舎は、生存が確認できた豚はいなかった。300 頭近くが死亡していた。



(写真 40)

屋外の豚 4 頭。人を見ると走って逃げるので、これ以上近づけなかった。栄養状態は良好であると判断できた。



(写真 41)

少し離れたところにあった豚舎。ここでは生存個体が多かった。なぜ生存していたかは不明であるが、この看板の向こうに飼料を入れるステンレスの容器があり、そこに飼料が入っていたことに起因する可能性も考えられた。



(写真 42)

手前が、その資料を入れる容器。さほどまでの豚舎とは、豚の種類も異なる。



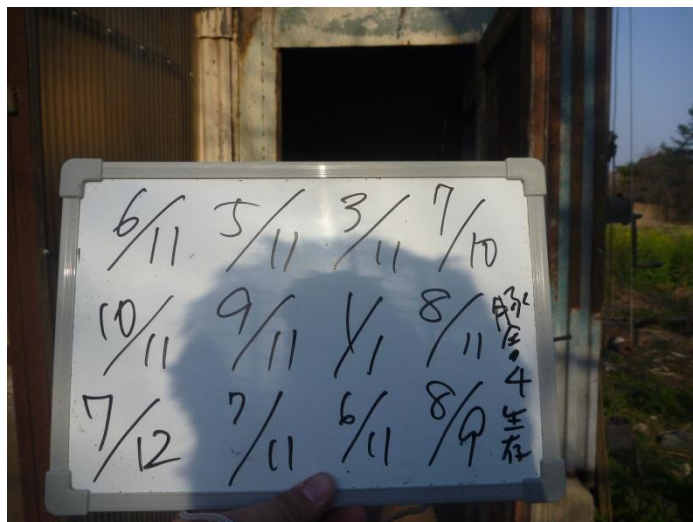
(写真 43)

破損した柵の隙間から豚が出ていくのが確認された。



(写真 44)

生き残っている豚は、元気はある。床が非常にきれいで、糞の形跡がなかった。



(写真 45)

写真 41～44 の生存を調べたホワイトボード。120 頭のうち 77 頭が生存していた。



(写真 46)

隔離豚舎での死亡は 1 であった。生存個体も確認されなかった。隔離理由などを書いた資料は見つからなかった。



(写真 47)

外に出た豚の中で 2 頭が排水溝で死亡が確認。



(写真 48)

外に出ている豚。先ほどの生存率の高かった豚舎と同じ種類。開いていた柵の隙間から脱出したものと考えられた。



(写真 49)

外部から閉められた豚舎でも、200 頭以上が死亡し、生存は 4 頭のみであった。ここでも、生存率の高かった豚舎のような飼料を与えるステンレス製の容器はなかった。



(写真 50)

やはり、生存個体のいるところでは、死体の皮膚が一部はがれていた。

20 km圏内で見られた犬と猫



(写真 51)

写真 1～4 の農家に迷い込んだ犬。この家で飼われていた。



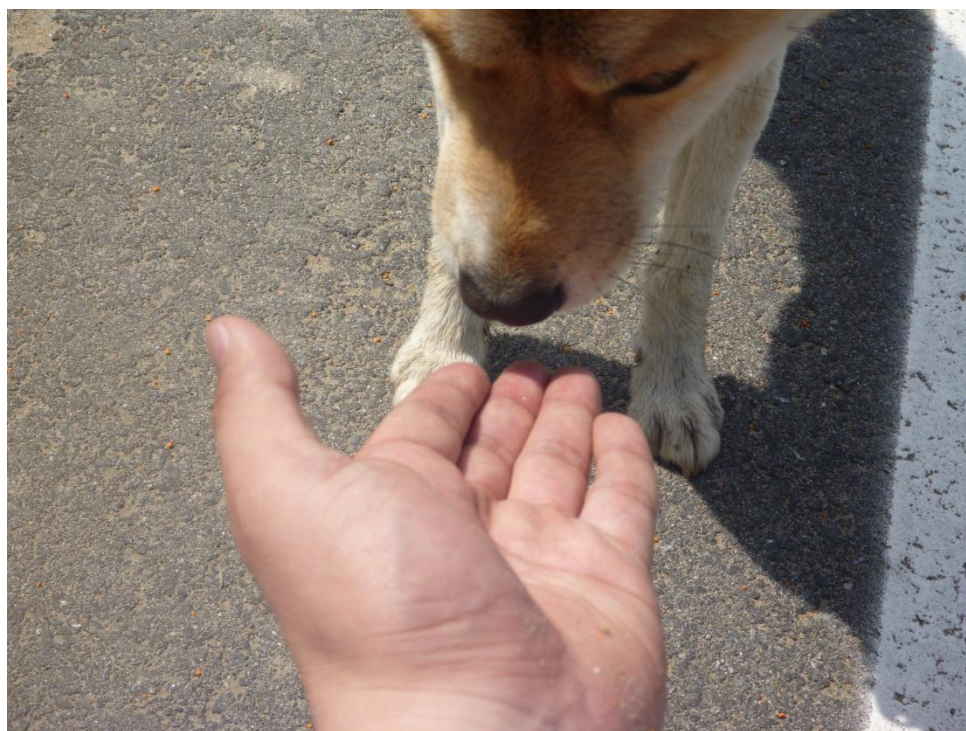
(写真 52)

首輪をつけて放浪する 2 頭。比較的雑種が多い印象。住人の一時帰宅されてボランティアもされている方に話を聞くと、「みんな純血種から連れて行く。」との不満があった。その住人の地区では 60 頭の犬がいる。つながれた犬の中には餓死した犬もいるということだった。



(写真 53)

最初は少しシャイな感じであったが、すぐに手からえさを食べた。



(写真 54)

写真 53 の犬。



(写真 55)

はねられて数日たっている猫。何ものかに少し食われている。道の端によけておいた。



(写真 56)

写真 55 の猫の首輪には、名前と連絡先が書かれていた。死体を避けている最中に白と黒の犬(写真右下)が接近してきた。



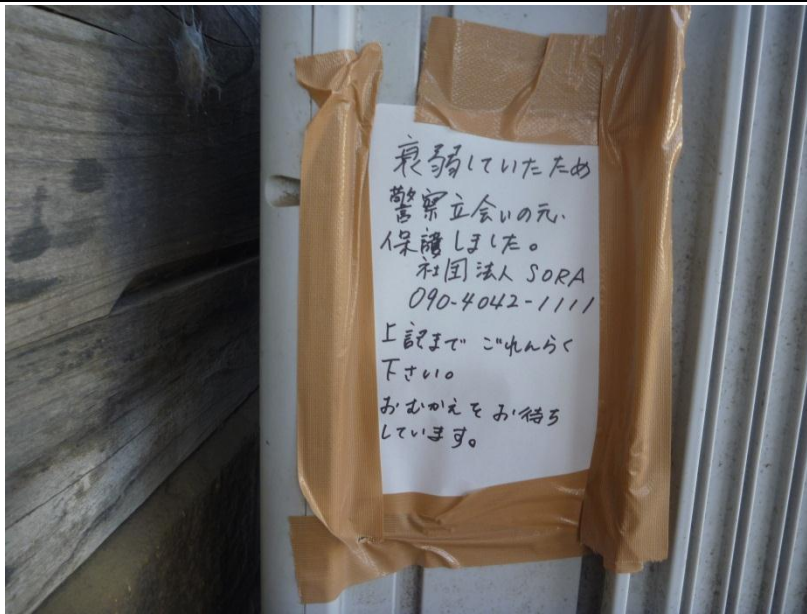
(写真 57)

写真 56 の接近してきた犬。人を見ると寄ってくる。容易に捕獲できるものの、家から離れないために、この家で飼われていた可能性が高い。



(写真 58)

ある農家の軒先に残された犬小屋と鎖。



(写真 59)

写真 58 の犬小屋に張られた紙。「連絡先などが書かれないままいなくなった場合には、一時帰宅した時に困ることがある。」と地元の声。



(写真 60)

この日1日で2件の猫の交通事故死の死体を見た。



(写真 61)

家から離れないゴールデンレトリバー。「純血種から連れて行く団体もある。」との声も聞かれた。見かけた犬の大半が雑種であった。



(写真 62)

検問を出てスクリーニング検査へ。身体的な被ばく量は 1.2 マイクロシーベルト程度であったが、軽装の場合には 2.2 マイクロシーベルトまで上がっている人もいた。また、長靴の底には泥や、豚舎の糞などが付着しており 15kcpm という測定値であった。このために、長靴は流水で流し除染した。避難地域へ入る場合には、危険備えて線量計を持参し、放射線への一定の知識のある者の同行が望ましいと考えられた。何度も出入りする場合には、被曝量に気を付ける必要があるだろう。

2011年3月11日、東日本大震災（おん）^{（U-tubeへ）}、福島県南相馬市に任じ、私も大震災、又津波とそれに続く東京電力の原子力発電所の事故に見舞われました。私の住む、小高区は、全域が半径20kmに位置しています。（自宅は17kmのところ）

原子力発電による爆発事故で、3/12には、小高区には避難指示^{指示}が出され、電気、水道が止まり、この防災無線も聞こえず、どうして近所の人はいなくなったのか、不思議に思っていました。翌3月13日（日）、小高区役所に行き、避難指示が出ているから、すぐ原町区の石神（中学校）に避難するように言われました。その時、区役所職員は無表情のソートのような顔で、仕事としていました。それは、彼らも、原子力発電所で爆発事故があり、小高も危い^{おそろしい}と知っていたからです。すぐ避難と言われても、ネコと9匹も室内飼っていた私は避難できず、おいていたら3月19日（土）、自衛隊員と区役所職員が、自宅に来て避難するように促され、9匹のネコをおいて家と去りました。その時私の判断から、室内飼いのネコを外に放すという失敗をおかしました。その時私は携帯電話を持っていて、友達に相談してよかったことが恨めます。

動物のその

避難所へ行っても、飼いのネコが心配で、3月19日から4月21日深夜までは、小高区は避難指示が出た1日か2日おきに自宅に戻り、私の家族であるネコにえさを与えていました。その間逃がした9匹のうち、5匹は1匹しかつかえなかったが、愛護団体にお預りをお願いしました。一匹が病死し、今も保護できないネコは2匹です。

4月21日午前、突然に明日4/22午前0時から、原発20km圏は、より厳しい警戒区域になると聞かされました。いまだ警察官にいくら聞いてもわからないし、答えがわからないに悪い知らせは何でも突然におこります。心配のあまり4/21、深夜11:00頃、自宅に行きました。保護することはできませんでした。

4月22日から、自宅に行かなくなり、検問に立っている警官から、入るには市役所の許可証がいり、というので、許可証を下さいと、市長に直訴もしましたが、もらえませんでした。市役所から、保健所に行くよう言われましたが、入るような自宅に行きそうな話はありませんでした。この間、保健所が、調査目的で、20km圏内に入っていました。これはあくまで調査目的で、道路をはいかいしている犬や猫は保護（すく）います。自宅の室内に置きにされている犬、猫には救済はさしおられません。また、~~県、動物担当者が~~20km圏内に調査目的を入る時、動物愛護団体が、~~諸に入って、犬、猫の頭、救済、保護~~おこるのです。国、県、市町村の3つの行政区、~~突然~~、^{政府（お）}、~~あり、国に対しては、現場の実情をよく見ていません。~~

避難所には、20km圏内の自宅にペットを置いてきた、あるいは連れ出せなかった人たちがたくさんいて、心配と心痛で、夜、ねられず、食事もとれず、精神的に病んでいる人がたくさんいます。こういう、動物のことで悩んでいる私たちを助けて下さい。4/22の立入禁止（☐）も過ぎてしまいましたが、どうか、私たち被災者の心配、心痛と取り除いて下さい。

~~私たちは、20km圏内には、東京電力の原子力発電所とは全く、何の関係もありません。~~

ところが、一度原発事故がおこると、周辺の人々は、^皆巻き込まれて、それまでの生活はたち切られ、悲惨な状況に置かれてしまいます。実際、私達、福島県のも今、悲惨な中にいます。

（※）どうか、動物のいのちも尊いと思っていだいている皆様、私たちを助けて下さい。決定機関である、国へ働きかけて下さい。動物のため、~~自宅に行かなくなり、~~いのちを救って下さい。そして、動物愛護団体を支援して下さい。

前からの
結果

例えは、この

※ (提案ですか、
1つのアイデアですか

まよかを導く

20km圏内

保護団体が保健所と共に行動して、多くの残された動物を
保護できるようにして下さい。 ~~捕獲~~ 一時 ~~また~~ 飼育 <sup>主に採集、
あるいは見物など</sup>
役割分担、保護された動物を預かり、等々やる人たちの
として、保護 どのほど残された動物を
捕獲する人と預かり人という役割分担

~~行政に担っていたなさいです。~~

作って ~~いた~~ お願いいたします。
いたなさい

の役割分担
一連の作業を

行政に作って いたなさい
等 お願いいたします

~~具体的案件として行っているのか~~
~~行政に任されているのか~~

東日本大震災

今ある命のために 頑張る女性たち



連帯を呼び掛ける吉田美恵子さん(左)
—南相馬市役所前で

「ペットを救いたい」

南相馬・吉田さん連帯し市に働きかけを

東京電力福島第一原発の事故で、立ち入り禁止となった警戒区域に残してきたペットを保護するため、南相馬市小高区東町2、学習塾経営、吉田美恵子さん(61)が30日、同市役所でプラカードを持

ち、同じ境遇にある住民に連帯を呼び掛け、賛同者を募り市を動かしたいと考えて「かけがえないペットの命を救いたい」と話した。

吉田さんは20*区内の自宅に雑種の猫9匹を飼っていたが、原発事故で30日(18日)、20*区外の同市立原町第一小の体育館に避難した。他の避難住民に迷惑をかけるまいと猫は自宅に残してきたが、立ち入りが禁止されるまで餌や水を与えに奥へ奥へと入ったという。この

間、1匹は病死し、5匹は仙台市の動物愛護団体に預けたが、自宅が警戒区域に指定されたため、3匹は残されたまま。市に立ち入り許可を要請したが明確な回答はないという。

吉田さんのプラカードをみて相談したという同市小高区戸谷、食品移動販売業、山本敏さん(63)は、震災

直後に飼っていた雑種猫が子犬を産んだため約1カ月間、自宅に残って世話をした。同市内の避難所に移ってから

もほぼ毎日、餌を与えに戻っていたが、警戒区域に指定される前日に首輪を外した。「別

れ際に車ですっと思い

【吉田正志】

れない。まだ自宅にいると思っているので迎えに行きたいが、もう入ることもできない」と肩を落とした。

食品生活衛生課は「衰弱している動物は保護することもある。だが、職員の人数も限られ全ての要請に応えられない」と話す。

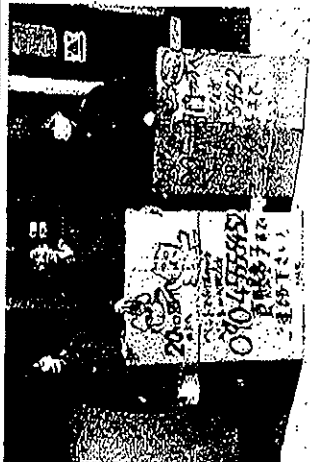
泉は4月28日と5月2日、狂犬病防止法などに基き、放し飼いをされた犬を捕獲しているが、猫や自宅内で飼っているペットは対象外で、4月30日までに捕獲したペットは大猫

吉田さんは「放逐すれば死んでしまう。できるだけ早く保護したい」と話した。吉田さんの連絡先(090・4555・5452)。

ペット救済団体を

南相馬の吉田さんと市に対応求める

東京電力福島第一原発から半径20*の警戒区域内に残したままになっている犬やネコなどのペットを救済し



20*区内のペットを救うための活動を開始した吉田さん(中央)ら

市(東市)のボウソライアととも同市役所前で活動を開始した。

吉田さんはネコ9匹を飼っており、1匹のうちは警戒区域指定前に園外に運んだ。残る4匹のうち1匹は死んだが、現在3匹が自宅に残っているという。

吉田さんはペットも家族同然と考え、保護所や市、園に適切な対応を求めている。

吉田さんは同団体のスタッフとともに、手作りのプラカードを手に市役所を訪れる人たちに理解と協力を求めた。

市はペットに対する要望が相次いでいることなど、市、県と対応を協議している。

問い合わせは、吉田美恵子さん(電話090・4555・5452)へ。

ように、共通の悩みを抱える人たちのネットワークを構築し、南相馬市小高区の吉田美恵子さんは30日から、動物ボランティア団体「アリスルエイド」(埼玉

2011年(平成23年)5月22日(月曜日)

友 民 島 福